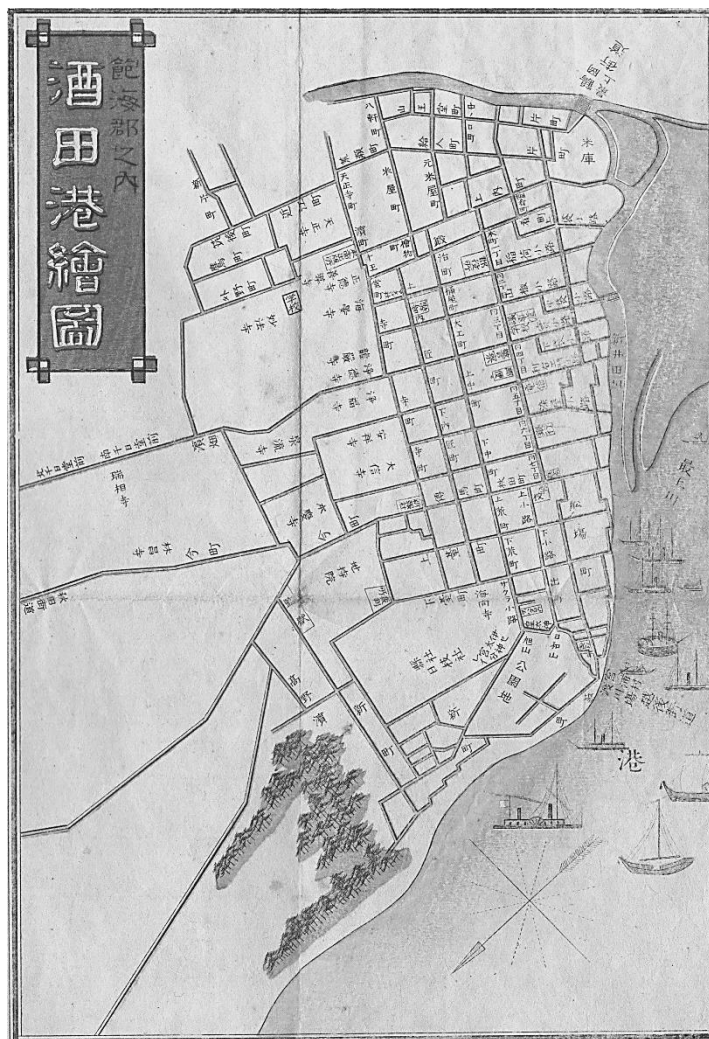


古き良き湊町の面影伝える 懐かしい酒田の旧町名

16世紀に最上川南岸から移転し、本町通りを基点に最上川河口につくられた酒田の町は、海運・舟運の発展とともに大きくなりました。河岸八丁と呼ばれた新井田川沿いの町々、街道筋の宿場町として栄えた秋田町・伝馬町などの古い町名や小路の名前には、酒田湊繁栄の物語が刻まれています。

昭和40～42年(1965～67)にかけて実施された「新住居表示」により、市内中心部の町名が変更されてから50年。旧町名を知らない世代も多くなりましたが、柳小路、寺町、台町などの旧町名・小路名は今も耳にします。酒田の歴史を伝える文化として、これからも大切に伝えていきたいものです。

今企画展では、現存する絵図としては最も古い「明暦2年(1656)酒田町絵図」(酒田市指定文化財/酒田市立光丘文庫蔵)をはじめとした古絵図や地図を中心に、町名の由来と変遷、酒田の街並みの移り変りをたどる、江戸時代から昭和にかけてのさまざまな資料を紹介します。



明治16年鮑海郡詳細図(部分)

古絵図に記された町と小路

昭和37年(1962)に「住居表示に関する法律」が公布され、市街地にある建物に順序よく番号をふり、分かりやすく住所を表示する「新住居表示」の実施が進んだ。

酒田市では、昭和40～42年(1965～67)に市街地の新住居表示が実施され、町名ががらりと変わった。本町、船場町など残っている町名もあるが、町の区画が変更されたため、古い町名がそのまま使われている所はほとんどなくなった。

展示している古絵図からは、市内中心部の町並が350年以上前からほぼ変わっておらず、旧町名の多くがそのころから使われ続けていたこと、酒田湊の発展とともに町が北へと拡大し、新しい町ができていることが分かる。



旧町名保存標柱

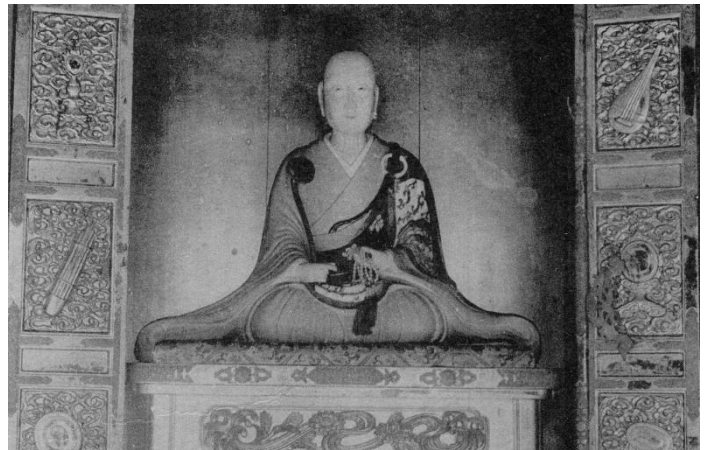
酒田の創始 徳尼公の伝説

酒田の町は、古くは「向う酒田」と呼ばれる最上川南岸の袖の浦(宮野浦)にあった。12世紀の末、平泉藤原氏が源頼朝に滅ぼされた時、藤原秀衡の妹・徳の前、あるいは後室・泉の方ともいわれる女性が、36人の遺臣とともに袖の浦に落ち延びてきたのが、その始まりといわれている。

この地で藤原一門の冥福を祈りながら余生を送った女性は、今からちょうど800年前の建保5年(1217)、静かにこの世を去った。戒名は「洞永院殿泉流庵徳尼公」である。

その後、36人の遺臣は地侍として船問屋を営み、地元民の先に立って湊の繁栄を支えた。また、長人(おとな)あるいは三十六人衆と称して、湊町の町政を担ったという。

徳尼公は、現在も泉流寺(酒田市中心西町)内の徳尼公廟にまつられ、毎年4月15日には三十六人衆ゆかりの人々が集まり、供養を行っている。



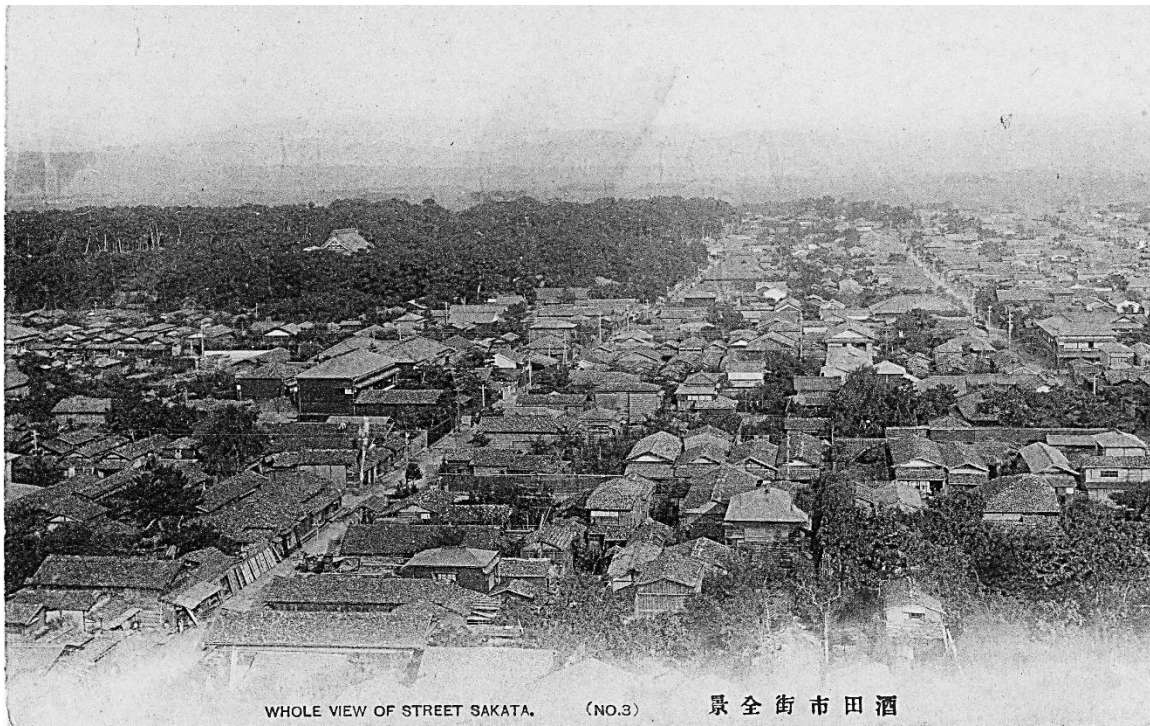
泉流寺にまつられている徳尼公像(大正5年の絵はがき)

最上川北岸への移転と町づくり

明応年中(1492~1501)、「向う酒田」には1,000余軒、最上川北岸の「当酒田」には140~150軒の家があったという記録があり、酒田湊の機能の大半が川南に集まっていたことが分かる。

しかしこのころ、度重なる最上川の洪水や流路の変化により、向う酒田を船着場として使うことが難しくなり、三十六人衆は話し合いの末に、当酒田への大移動を決断。16世紀の永正年間から慶長初期の間に移転し、最上川河口の砂丘に町をつくったといわれている。

慶長6年(1601)に最上義光軍による東禅寺城(亀ヶ崎城)攻撃が始まり、酒田の町も焼け落ちてしまうが、戦後、東禅寺城主・志村伊豆守が焼け跡に町割りを行った。これが、現在の酒田市中心部の町並みの基になっている。



酒田市街全景(明治時代の絵はがき)

商人町の酒田町組、城下分の内町組・米屋町組

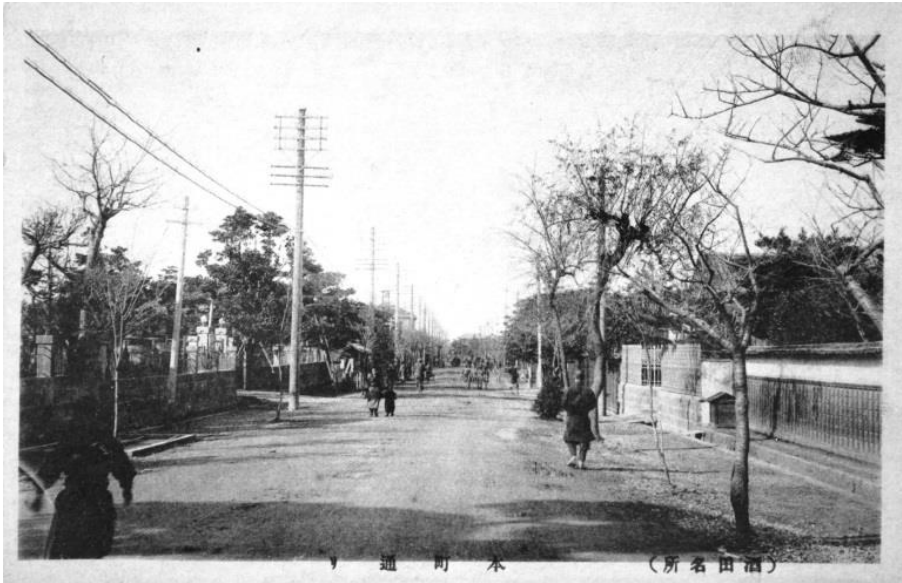
江戸時代までの酒田は、亀ヶ崎城分といわれた「内町組」「米屋町組」、向う酒田から移り住んだ三十六人衆たちが開拓した商人町である「酒田町組」の3地区に分かれていた。

内町組・米屋町組は、文明10年(1478)ころに五丁野(現在の四ツ興屋辺り)から新井田川東岸に移転したといわれる東禅寺城(後の亀ヶ崎城)の城下町として形成された(※)。

上杉家支配の慶長4年(1599)ころ、東禅寺城の外郭を新井田川西岸まで広げたが、最上家の支配を経て、元和8年(1622)に酒井家が入部すると、武家屋敷を引き揚げて町屋敷となった。

その後、内町組・米屋町組と酒田町組との交通の便をよくするために、内町と本町一丁目の間を通した道「突抜(つきぬき)」を設け、同じころに外堀も埋めたといわれている。

※東禅寺城の所在地、移転時期については、天正(1573~92)の初めなど諸説あり。



本町通り(大正ころの絵はがき)



戦前の内町

亀ヶ崎城下の鵜渡川原

元禄9(1696)の亀ヶ崎城下大絵図には、城下町だった鵜渡川原(現在の亀ヶ崎地区)の町が描かれている。

鵜渡川原の歴史は古く、和銅7年(714)に尾張国愛智郡の農民200戸が開拓したと伝えられている。東禅寺城が五丁野にあった時代には、四ツ興屋の南から鵜渡川原の東端までが「東禅寺」の地名で呼ばれ、城が新井田川東岸に移ると、その外郭となった。

慶長6年(1601)に城主となった志村伊豆守は、最上地方から連れてきた家臣たちを鵜渡川原に住ませた。戸沢町、長泥町、最上町などの町名は、家臣の故郷からとったといわれている。

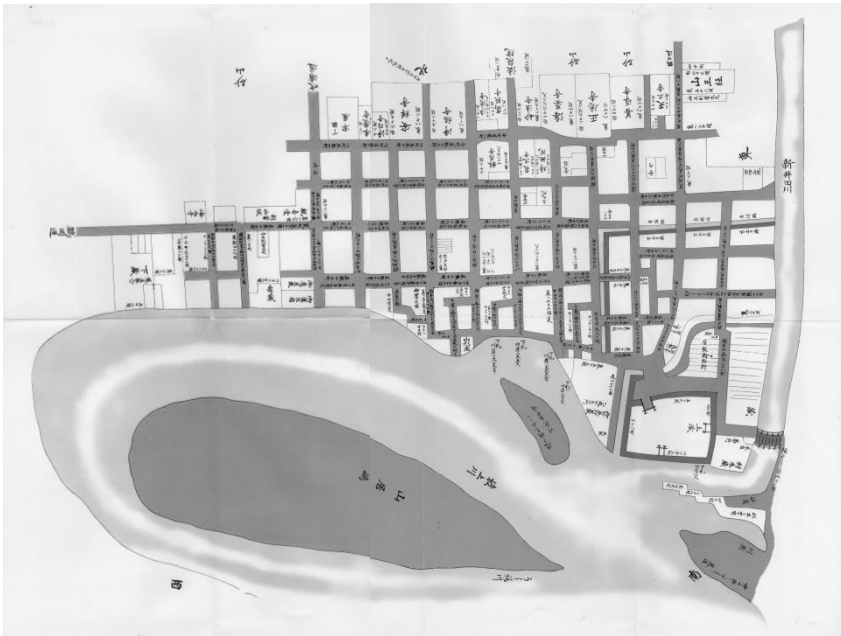
明治9年(1876)には鵜渡川原村となり、昭和4年(1929)に酒田町と合併した。

明暦2年酒田町絵図(『飽海郡誌』より)

現存する酒田の町絵図では最も古く、実物は酒田市立光丘文庫に所蔵されている(酒田市指定文化財)。

この画像は、大正12年に飽海郡役所が編纂した『飽海郡誌』に掲載された複製画。

最上川河口に沿って、本町通りを中心に東西に通りが延び、北側には寺社が並ぶ様子は市内中心部とほぼ変わっていない。西側と北側はまだ開拓が始まっておらず、砂丘が広がっている。



内町組	一 内町 七拾六軒	一 老ノ町 貳拾壹軒	一 秋田町 三拾三軒
	一 片町 七拾三軒	一 二 貳拾軒	一 伝馬町 三拾二軒
	一 あわち小路 九軒	一 三 三拾三軒	一 内匠町五丁ニ而九拾三軒半
	一 かしはた町 拾六軒	一 四 貳拾軒	一 寺町五丁ニ而四拾貳軒
	一 肴町 拾六軒	一 五 拾九軒半	一 荒町 三拾壹軒
	一 本米屋町 貳拾四軒	一 六 拾七軒半	一 三町合
	一 浜町 拾四軒	一 七 拾五軒	一 千二百七拾七軒
	一 貳百二拾八軒	一 片肴町 貳拾六軒	
米屋町組	一 新米屋町 六拾五軒	一 上袋小路 三拾軒半	外 新井田 貳拾軒
	一 山王堂町 三十壹軒	一 稻荷小路 貳拾三軒	
	一 荒瀬町 拾八軒	一 山椒小路 貳拾壹軒半	
	一 浜町横丁 拾八軒	一 中袋小路 貳拾五軒	
	一 同立丁 三拾三軒	一 御宿小路 貳拾五軒	
	一 百六拾五軒	一 下袋小路 貳拾五軒半	
	一 茶せん町 五軒	一 利右衛門小路 貳拾軒	
	一 獵師町東小路 四拾九軒	一 横鍛冶町 貳拾軒	
	一 同 西小路 三拾五軒	一 中町七丁ニ而(にて)百貳拾三軒	
	一 八百八拾四軒	一 片平町 五軒	
		一 片平町 拾六軒	
		一 林昌寺小路 拾貳軒	
		一 いせ津小路 六軒	
		一 御宿小路通 五軒	
		一 持地院小路 拾軒	
		一 地藏院小路 九軒	
		一 かすや小路 九軒	

明暦二年絵図(酒田市立光丘文庫蔵)に記されている町名と戸数

茶屋が集まった新町(高野浜)

江戸時代に各地の湊町で発展したものに、商人たちの社交場であり船乗りたちの遊び場だった「遊所」がある。酒田では、高野浜(新町)と今町、船場町が「酒田三遊所」と称された。

秋田街道の入り口に当たっていた今町は、最も早くから茶屋街として発達した。新興の船着き場として目覚ましく成長した船場町にも、いつしか茶屋ができ、文化10年(1813)に36軒の茶屋が営業を許されている。

湊に近く、船乗りの宿屋があった高野浜にも、文化・文政の湊の繁盛に伴い茶屋ができ、文政4年(1821)に5軒が営業を公認された。

三遊所のにぎわいは明治時代になっても続いたが、明治27年(1894)の庄内地震で、船場町、今町の茶屋の多くが壊滅的な被害を受け、茶屋はすべて新町に移転させられた。このころから次第に台町に料亭が建ち、この一帯は酒田の歓楽街・料亭街として成長した。



料亭街のたたずまいを残す姿見小路(現在)

さまざまな商売でにぎわった町

全国各地から船が湊に出入りし、大勢の人が行き交った酒田の町には、さまざまな商売を営む店が軒を連ねていた。

秋田街道沿いの秋田町・伝馬町には宿が並び、本町通り北側に並んだ中町通り、内匠町通りも古くから商店街を形成していた町である。鍛冶町、桶屋町、大工町、染屋小路、肴町など職業が町名になった職人町も古くから出来上がっており、明暦2年(1656)の町絵図で町名を確認できる。

内町組・米屋町組では、鵜渡川原への入り口に面していた内町通り、生石方面へ向かう鶴田口に通じる天正寺町などが、商店街として繁盛した。内町のにぎわいは、天保時代の塞道絵幕「大壽和里大祭事(おすわりだいさいじ)ー酒井候御安堵祝宴」(酒田市指定文化財)に描かれている。



大壽和里大祭事ー酒井候御安堵祝宴」(酒田市指定文化財)

400年の歴史を持つ酒田まつり

酒田まつりが始まったのは、今から400年以上前の慶長14年(1609)。もともとは酒田の産土神(うぶすながみ)である上・下の山王社の祭礼として、旧暦四月の中の申の日(なかのさるのひ※)に行われていた。

上の山王社は、亀ヶ崎城分の内町組・米屋町組の鎮守として、下の山王社は商人町だった酒田町組の鎮守として信仰を集めてきた。現在も「上の山王さん」「下の山王さん」と呼ばれ、市民に親しまれている。

祭礼が両社合同で行われるようになったのは正保3年(1646)から。町奉行・乙坂六左衛門の発意によるものだった。その後、酒田の繁栄とともに祭りも盛大になり、その評判は江戸や大坂にまで届いていた。

明治に入ると、神仏分離令によって両社の名称は日枝神社になり、祭礼日は新暦の採用によって5月20日になった。

昭和51年(1976)の酒田大火からの復興後、名称を「酒田まつり」に改め、平成21年には創始400年本年祭を盛大に行っている。

※中の申の日…その月の2番目の申の日



酒田日枝神社大祭之図 (明治26年)

祭りを支える頭家(とうや)の変遷

山王祭では、酒田町組の氏子から選ばれた頭人(とうにん)が、神事補佐の責任者を務めた。頭人の家は、頭家(当家とも書く)と呼ばれた。頭人は神様を迎える神宿を開き、祭りにかかる費用の一切を負担した。

天明(1781~1789)のころ、本間光丘が、京都祇園祭の山鉾巡業を模した華やかな山車行列の形を整えたといわれるが、この山車行列の名物だった、背の高い立山鉾を作るのも頭家の役目だった。

「頭家を三回もすると家がつぶれる」といわれるほど経済的な負担が大きかったが、永久に残る名誉であり、有力者として認められる機会でもあった。

また酒田町奉行が神馬を出し、亀ヶ崎城では儀仗用(※)に槍・鉄砲・弓を貸し付けたが、亀ヶ崎城分の内町組・米屋町組の富豪が、神馬の宿を務め、これを御葛籠馬宿(おつづらうまやど)と称した。酒田町組の頭家に相当し、その家の主人は祭りの主な奉仕者となった。

酒田町組の頭家の数は、初め8軒だったが、不景気を理由に元禄7年(1694)に4軒に減り、享和元年(1801)にはさらに2軒に減っている。

明治4年(1871)、裕福な家が選ばれる頭家の制度は廃止され、翌年からは酒屋や呉服屋などの営業組合による輪番制に、同13年(1880)からは各町による輪番制になった。金銭的な負担は変わらず、頭家を辞退する町が出るなど、祭りの存続が危ぶまれる事態が起きたが、本間家6代当主・光美(こうび)が中心になって積立金制度を始め、危機を救った。

その後の祭りにも時代による盛衰はあったが、現在も、かつての酒田町組と内町組・米屋町組の町で組織した神宿組合が、輪番で頭家を務め続けている。 ※ 儀仗…儀式用の装飾的な武器や武具



上下中町の神宿(大正9年『御神宿記念写真帖』より)

旧町名の由来など

旧町名	由来や場所など
上内町 下内町	亀ヶ崎城の外堀の内にできた通りだったので町名となった。元和8年(1622)に武家屋敷が引き上げ、町屋敷になった。明暦2年(1656)絵図に戸数76軒。『飽海郡誌』によると、貞享2年(1685)に上・下に分かれた。鶉渡川原や農村からの入り口に面し、商店が軒を並べていた。
片町	西側にのみ家があったことに由来。上蔵、新井田蔵などがあった(現在の酒田商業高校跡地)。明暦2年絵図に戸数73軒。古くは給人町まで片町となっていた。
細肴町	魚屋が多くあった。本来はここを肴町といった。明暦2年絵図に戸数21軒。
中ノ口町	最上氏時代、新井田川筋から城への中の口に位置していたことによる。古くは「中の口川端町(かしばたまち)」といった。
給人町	最上氏時代、給人を住ませたことに由来するといわれる。『飽海郡誌』には延宝6年(1678)に片町から分かれて一町になったとあるが、明暦2年(1656)絵図にはなく、寛文10年(1670)に名前が見えることから、明暦2年から寛文10年までの間にできたと思われる。
元米屋町	16世紀の武藤氏時代に年貢米を囲い置きし、その関係者が住んだ。古くは「米屋町」といったが、「新米屋町」ができて「元米屋町」になった。明暦2年(1656)絵図には「本米屋町」とある。一部には「古米屋町」といった。
山王堂町	慶長6年(1601)から寛永13年(1636)まで上の山王社があったことに由来する。「山王堂小路」ともいった。
米屋町	上杉氏時代の天正18年(1590)～文禄2年(1593)のころに町割り。荒瀬郷、遊佐郷の米を取り扱い、はじめは「新米屋町」とっていた。
八軒町	寛永元年(1624)に家が建ち始め、天和2年(1682)に米屋町の新井田川沿いを分け一町とした。当初は人家が8軒だったことに由来。元禄9年絵図には「八間町」とある。
荒瀬町	米屋町の一部を分けて一町とした。荒瀬郷の米宿があったことに由来。明暦2年絵図に戸数18軒。
浜町	明暦2年絵図では、浜町、天正寺町、近江町の地域はすべて浜町となっている。この地一帯が砂浜だったことによる。狭い意味での浜町は「内町組浜町」といわれ、善導寺の前にあったことから、「善導寺小路」ともいわれた。
天正寺町	明暦2年図では「浜町」。天正寺の寺伝によると、承応元年(1652)にここに移転してきたので、その後に「天正寺町」と呼ぶようになった。
近江町	「浜の町横町」といわれ、天和2年に近江町と改められた。最上氏時代の川北奉行・寺内近江の宅跡、あるいは与力の宅跡との説もある。
筑後町	川北奉行の齋藤筑後の宅跡、あるいは筑後の同心与力の宅跡といわれる。元和8年に少数の民家があったが、寛永7年(1630)に下蔵建築のために人家が立ち退く。しかし下蔵は寛文12年(1672)に新井田に移り、天和3年(1683)に家屋が建つ。「鶴田口浜町」といわれていたが、貞享3年(1686)に筑後町と改名。
鷹町	宝永5年(1708)、浜町北側の砂山に内町組の名子などが家作。町にある稲荷神社を「鷹尾山金剛院」とっていたことに由来するといわれる。外野町とともに「新地」と呼ばれ、江戸時代後期の改正増補酒田絵図には「新地東内町」とある。通称「東町」といわれた。

外野町 (戸野町)	鷹町とともに新地と呼ばれた所。改正増補酒田絵図では「新地西内町」。通称「西町」といった。昭和初期でも西町との俗称があった。正徳4年(1714)の記録に「外之町」。他に「戸野町」「殿町」の用字がある。昭和24年(1949)に戸野町となる。
新片町 (新堀切)	西側にしか人家がなかった片町の東側にも人家ができたが、その東に堀を隔ててたくさん米蔵が並んでいたことから、享保11年(1726)、蔵を火災から守るため筑後町の外れに移転させて出来た町。新堀切ともいわれた。
浜畑町	外野町北の「浜畑」は、平田郷大町組に属した広大な土地だった。寛保2年(1742)に町並をつくるのを許され、新地に続く通りが作られた。宝暦4年(1754)には文殊院(現八雲神社)が米屋町から移っている。
南千日堂前 北千日堂前	万治年間(1658~61)に創始された瑞相寺(酒田南高校前)を千日堂抱念仏堂といった。浜畑に続き、千日堂の前に家作され、後に南・北に分けられた。
本町	向う酒田から移転して初めに町割りされた酒田草創の地。「元町」と書いた記録があり、本来は「ほん町」ではなく「もと町」と呼んだとも考えられる。三十六人衆を中心とした裕福な商人が住む酒田最大の問屋街で、中心街であった。
肴町 (片肴町)	肴屋が多く住んだ。東側に亀ヶ崎城の外堀があり、西側のみに人家があったので「片肴町」といった。「細肴町」と合わせて「肴町」ということも多い。堀は明治2年(1869)に埋め立てられた。
上袋小路	新井田川沿いの舟着き場として栄え「船乗町」ともいわれた「河岸八丁」のひとつ。明暦2年以前の創始。町の形が袋小路になっている。
中袋小路	河岸八丁のひとつ。明暦2年以前の創始。町の形が袋小路になっている。
下袋小路	河岸八丁のひとつ。明暦2年以前の創始。町の形が袋小路になっている。
稲荷小路	河岸八丁のひとつ。寛永元年(1624)の記録に名前がある。町内の竜徳稲荷神社を祭っていることに由来。
山椒小路	河岸八丁のひとつ。慶長14年(1609)の記録に名前がある。由来は不明。「山升小路」「山伏小路」の記載もある。
実小路 (御宿小路)	河岸八丁のひとつ。天正19年(1591)に加賀の前田利家の宿舎としたことから、もとは「御宿小路」といった。明治9年(1876)に「実小路」に改称した。
利右衛門小路	河岸八丁のひとつ。明暦2年以前の創始。酒田町の長人・村井理右衛門が住んでいたことに由来する。理右衛門の用字がところどころに見られる。
染屋小路	河岸八丁のひとつ。正保3年(1646)の記録に名前がある。染屋を営む者が多く住んでいた。
檜物町 (曲師町)	檜物(曲物)細工の職人が多く住んでいたという所で、俗称で「曲師町」ともいった。明暦2年~天和2年の創始か。
鍛冶町	慶長~元和年間(1596~1624)の町割り。明暦2年絵図では「中町一丁目」。鍛冶職人が多く住み、天和2年(1682)までに鍛冶町と称した。元禄9年絵図に鍛冶屋敷55軒。
笠屋町 (茶筌町)	古くは「茶筌町」。天和のころに「笠屋町」と改め、文政2年(1819)には「新鍛冶町」と改めた。高野浜とともに酒田御町外とされていた。
桶屋町	慶長~元和年間の町割り。明暦2年絵図では「中町二丁目」。桶屋が多く住み、元禄9年図には桶屋屋敷19軒。
大工町	慶長~元和年間の町割り。明暦2年絵図では「中町三丁目」。大工が多く住み、元禄9年図には大工屋敷20軒。

上 下	中 中	町 町	中町通りは、慶長～元和のころ、本町と内匠町の間に町割りしてできた。明暦2年絵図には中町一丁目から七丁目までが記されている(鍛冶町・桶屋町・大工町は一～三丁目)。天和3年(1683)～貞享3年(1686)に上・下の2町に分けられた。	
	十 王	堂 町	永正元年(1504)創建の伝承がある十王堂があることに由来。明暦2年絵図では「横鍛冶町」。改正増補酒田絵図では、酒田弁の発音を当てた「浄土町」と記されている。	
上 下	内 内	匠 匠	町 町	元和5年(1619)に肝煎・齋藤内匠の尽力により町割りができたので、その名をつけた。天和3年ころに上・下に分けられた。
	寺		町	創始不詳。その名の通り寺の門前町。
	秋		町	天正から慶長17年(1573～1612)の間にできた。秋田街道に面しているから、町年寄・永田若狭が秋田から移住してきたからなど諸説があるが、はっきりしない。
	伝		町	馬 慶長17年～明暦2年に町割り。秋田街道の入り口になっており、駅馬が置かれ、宿屋があったことに由来。
	今		町	明暦3年～天和2年に町割り。天和3年の家数35軒。秋田街道上にあることから茶屋家業の者が居住し、酒田三遊所のひとつとして全国に知られていた。名称の由来は不明。
上 下	台 台	町 町		明暦2年から天和3年の間に町割り。中台式右衛門が町奉行を勤めていた時に町割りされたので、名字の一字をとったという説があるが、明らかでない。
上 下	荒 荒	町 町		天正年中～慶長17年の町割り。本町(モトマチ)に対して荒町(アラマチ)の意か。
上 下	小 小	路 路		明暦2年絵図では、上小路に当たる所が「獵師町東小路」、下小路にあたる所が「獵師町西小路」となっている。元禄9年絵図では、それぞれ「上獵師町」「下獵師町」と記載。獵師町は酒田草創期の町で漁師渡世が住んでいた。
	桜		路	桜並木があったことに由来するといわれる。明暦2年図には「片平町」、元禄9年図には「八間町」と書かれている。
	船		町	場 船着場が名称となった。最上川の中であつたが、流域の変化などで川原ができ、獵師町下谷地、獵師町下河原といわれていた。元禄15年(1702)頃から家が建ち始め、宝永4年(1707)に町名がついた。
	出		町	古くは「獵師町」といわれた通りの一部だが、「出町」と表示されるようになってからの場所が、絵図によって食い違っている。元文4年(1739)の「三十六人御用帳」に名前がある。
	新		町	空海が一寺を建てたという伝説のある「高野浜」は酒田御町外とされていた。江戸末期、高野浜と下山王社との間に町がつくられ「高野浜新屋敷」となり、万延元年(1860)に「新町」と改称し酒田組になった。
最 長 戸 横 袋 立 横	上 泥 沢 道	町 町 町 町 町 町 町		慶長6年(1601)、志村伊豆守が長谷堂城主(山形)から東禅寺城主になった折、長谷堂より伴ってきた家臣を鵜渡川原の地に移住させて町割をし、それぞれ出身地の地名を町名にした。最上町、長泥町(長瀨町)、戸沢町ができ、町を結ぶ道として横町、袋町、立町、横道町が生まれた。

参考資料：『酒田の地名』（高山順吉）、『酒田のむかし一町と村々』（須藤良弘）

町名の俗称と小路名

小路名	由来や場所など
上通り	内町組・米屋町組に当たる地域、すなわち上山王社の氏子となっている地域。
淡路小路 (<small>あお</small> の青渡小路)	天正・文禄・慶長(1573~1614)のころに、内町組組頭だった斎藤淡路の住居があった。享保のころ(1716~1735)から度々火災があり、「淡」の字は火が重なるというので「青渡小路」に改めたという。
新町	酒田大火前の元米屋町稲荷神社前から青渡小路までの細小路。
弥右衛門小路	元禄9年(1696)絵図にある。内町から元米屋町(新町)への、現在の元米屋町稲荷神社前の細い通り。大庄屋・三丁目弥右衛門の家があった。
弥兵衛小路	元禄9年絵図にある。元米屋町通りの給人町と山王堂町の間。
五郎右衛門小路	元禄9年絵図にある。元米屋町通りの山王堂町から川端までの間。
一之口川端	元禄9年絵図にある。八軒町通りの東端、新井田川岸。
クリ船小路	元禄9年絵図にある。八軒町東の新井田川沿い横丁から山王堂町へ抜ける細い小路。酒田大火後になくなった。
名古屋小路	元禄9年(1696)の絵図では、この通りの西側はいずれも名子屋(借家)住まいである。そこから「名子屋小路」と呼ばれたらしい。「名護屋小路」「団子屋小路」とも書いた。
善導寺小路	「浜町」の俗称。
大小路	天正寺西側の通り。元禄9年絵図では「寺小路」。
馬場小路	元禄9年絵図では「西小路」。いつのころか馬場があった場所という説がある。「バンバ小路」と呼ばれた。
堀切 (入船小路)	筑後町より東への通り。「入船小路」ともいった。昭和の市町村合併前は浜田村から中平田村の一部だった。
合掌小路	南千日堂前から林昌寺裏の畑地の中の細道。現在の住吉台児童公園の所に火葬場があったころ、この小路を合掌して歩いたことによる。「ガッチョ小路」と呼ばれた。
山手	筑後町通りの新片町への角から、北へ駅前通りまでの通りの地域。旧西荒瀬村分。
谷地田	酒田駅前通り北側の旧西荒瀬村酒井新田天王下・北水出の地域。
渋谷町	新片町から酒田駅までの通り。旧西荒瀬村酒井新田南水出で、渋谷勇吉が世話役になって町づくりがされた。
下通り	旧酒田町組に当たる地域、すなわち下山王社の氏子となっている地域。
堀端 (鍛冶横小路)	本間家旧本邸東側の通り。本町と鍛冶町の間辺りから東の新井田川と肴町を通し、新井田川下流へと通じる亀ヶ崎城の外堀があった。古くは西側にのみ家があり「片平町」とも呼ばれた。元禄9年絵図では「鍛冶町横小路」。
つき 突 <small>ぬき</small> 抜	本町と城下町だった内町の間には通りがなかったので、突抜き道路にした。
雷小路	堀端の北に続く十王堂町の通り。鍛冶町角から内匠町角までの間。由来不明。
上ノ山 (林昌寺小路)	旧本町一丁目と二丁目の間で、本町から中町通りまでの小路。永禄3年(1560)から寛永元年(1624)に、ここに林昌寺があったことから「林昌寺小路」と呼ばれていた。
談議所門前	談議所になっていた龍巖寺の門前。単に「門前」ともいった。
五大院坂	内匠通りの五大院(現在の天満宮)前の坂を「五大院坂」といい、この坂を中心に「坂の上」「坂の下」ともいった。
下ノ山 (伊勢津小路)	旧本町二丁目と三丁目の間で、本町から内匠町通りまでの小路。寺町角までとする古図もある。五大院の西側に伊勢堂があり「伊勢津小路」と呼ばれた。

横 町	「下の山」のうち中町通りから内匠町通りまでの小路。「横小路」ともいった。
じろま小路 治郎マ小路	横町の北に続き、内匠町通りから寺町通りまでの小路。安藤治郎吉という人力車屋があった。「マ」は職人の頭などを呼ぶときに付けた敬称。
アラレ小路 (泉小路)	実小路(御宿小路)の北に続き、本町通りから中町通りまで。酒田弁では「アラネ小路」。由来は不明。三十六人衆で町年寄の上林和泉が住んでいた所であり、「泉小路(和泉小路)」「上林小路」とも呼ばれた。
仙庵小路	アラレ小路の北に続き、中町通りから内匠町通りまで。仙庵という医師の家があった。「世南小路」「瀬南小路」とも。
林昌寺小路 (梨屋小路)	仙庵小路から北に続く小路。寛永元年、林昌寺が上ノ山からこの小路に移転したため、小路名もここに移った。林昌寺が現在地に移転した後、梨屋があることから「梨屋小路」とも呼ばれた。
じじやました 祖父山下	元禄11年(1698)、火災の類焼を恐れた妙法寺が、従来 of 寺の後方の砂地3万坪を藩から借り受けて移転した。その際、風砂を防ぐため老僕に竹垣を造らせ、次第に砂山ができたことに由来。
きたね小路	佐藤伝兵エ薬局角から祖父山下通りへの、浄徳寺と浄福寺に挟まれた区間は、両寺の大木が道を覆い、乾くことの少ない馬糞混じりの泥道だった。
柳 小 路	宝暦10年(1760)、防火のためにこの通りの幅を広げ、後に柳を植えたことに由来。柳小路は本町から寺町までの通りの総称。本町と中町の間は「地蔵院小路」「藪田小路」「広小路」、中町から内匠町の間は「善右衛門小路」、内匠町から寺町の間は「青物小路」と呼ばれた。
持地院小路	旧本町五丁目と六丁目の間で、本町通りから中町通りまで。長禄3年(1459)、持地院が小湊からこの場所に移ったことに由来。持地院は元亀元年(1570)に内匠町の坂の上に移り、泉流寺と並んでいたが、寛政9年(1797)に現在地に移った。
ハサミ小路	持地院小路の北に続き、中町通りから内匠町通りまで。文化年間の絵図では寺町まで。由来は不明。
サンショ小路	ハサミ小路の北に続き、内匠町通りから寺町通りまで。「寺小路」とも呼ばれた。由来は不明。
根上小路 (糸屋小路)	三十六人衆の根上善兵衛が住んでいた。糸屋が並び「糸屋小路」ともいわれた。
袈裟小路	現在の本間病院裏手で、旧本町六丁目に並行している通り。由来不詳。
粕谷小路	根上小路の北に続き、本町通りから中町通りまで。三十六人衆・粕谷宮内が住んだ。
於夏小路	粕谷小路の北に続き、中町通りから内匠町通りまで。お夏風呂という風呂屋があった。お夏という美人女将がいたため、若い衆が押しかけ繁盛したという。
南蔵院小路	於夏小路の北に続き、匠町通りから寺町通りまで。修験南蔵院があったことに由来。
六軒小路	秋田町角から出町に向かって、上小路までの小路。
いきつっぱり 行突張小路	旧小幡の東の下で、行き詰まりの小路。
片 平 町	明暦2年絵図では、桜小路と出町の間的小路。片側にのみ家があった。「八間町」「銀杏小路」ともいわれた。明和7年絵図(1770)には「越中町、八軒丁とも」とある。
池 田 小 路	船場町のテック両羽前から北の細い小路。この辺りが池田家の土地だったこと、あるいは明治27年(1894)の庄内地震以前にここに池田写真館があったことに由来。
肝煎小路	明暦ごろ、この場所に屋敷割がされたとき、肝煎たちの下屋敷として与えられたことに由来。

エノミ小路	肝煎小路の西に続く小路。「下台町横小路」「小右衛門小路」とも。
観音小路	寺町からの通りで、伝馬町から上台町までの間。小路の北にある観音堂に由来。
山王小路	観音小路に続き、上台町と下台町の間。下の山王社東口前。
弁天小路	小松屋角から下台町角までの間。小路の北側にある巖島神社（弁天さん）に由来。
姿見小路	相馬楼と香梅咲の間の細い小路。観音堂、巖島神社へと続く。料亭へ向かう芸妓たちが、ここで手鏡を見て身だしなみを整えたからともいわれる。
見返小路	現在の裁判所角から高野浜へ向かい、新町遊郭大門への道だった。遊女となじみ客が別れを惜しんで互いに見返ったからといわれる。この道の周辺を「松の山」といった。
三味線小路	新町琴平神社前から南への袋小路。三味線職人・佐藤鶴吉が住んでいた。
末広町	旧琢成小学校（現在の酒田市総合文化センター）の辺り。大正～昭和初期の地図にあり。由来は不明。
梨畠	現在の琢成小学校正門前の通りと、畠山楽器角から北千日町への通りの間で、林昌寺までの地域。一面が梨畑になっていた。昭和初期には、林昌寺西の大道添は「新開地」と呼ばれた。
左右衛門小路	酒田駅前通り北側の裏通り。八雲神社の北側角から駅前通りに並行する道で、ここに住んだ石川左右衛門が世話役になって町づくりをした。
竹屋小路	寺町通りの浄福寺前。竹屋・小野多右衛門の家があることから。

参考資料：『酒田の地名』（高山順吉）、『酒田のむかしー町と村々ー』（須藤良弘）

○訂正（三味線小路について）

三味線小路について、参考資料とは別の場所を示している資料があったため、改めて調査し、旧新町に住んでいる方より、正確な場所と由来を教えてくださいました。

<p>三味線小路…現在、ト一屋新町店駐車場になっている所に南北に通っていた行き止まりの細道。角に三味線を修理・調整する職人が住んでいた。</p>
--

住居表示実施町名一覧（昭和40年～42年）

	実施後町名	実施前町名（旧町名）
昭和40年4月1日実施	船場町一丁目	船場町・秋田町・上小路・下小路・出町
	船場町二丁目 （4～6街区）	船場町
	日吉町一丁目	上台町・下台町・今町・新町
	日吉町二丁目	伝馬町・上台町・下台町・上荒町・下荒町・秋田町・上小路・下小路・出町・桜小路
	南新町一丁目	新町・下台町・船場町
	南新町二丁目	新町・船場町
	北新町一丁目	新町字高野浜・新町字光ヶ丘・新町・今町・上台町
	北新町二丁目	新町・新町字高野浜・新町字光ヶ丘
	北今町	今町
	北里町	北千日堂前字大道添
	住吉町	住吉台・北千日堂前字松境・北千日堂前三丁目・北千日堂前四丁目・北千日堂前五丁目・北千日堂前字大道添
	光ヶ丘一丁目	新町字光ヶ丘・北千日堂前字大道添
	光ヶ丘二丁目	新町字光ヶ丘
	光ヶ丘三丁目	新町字光ヶ丘
	光ヶ丘四丁目	新町字光ヶ丘
	光ヶ丘五丁目	新町字光ヶ丘・松風町
	大浜一丁目	新町・新町字光ヶ丘
大浜二丁目	新町字光ヶ丘	
昭和41年4月1日実施	西野町	西野・北千日堂前九丁目・大字酒井新田字水口・大字酒井新田字道ノ下
	泉町	元泉・西野・大字酒井新田字家際
	北千日町	北千日堂前六丁目・北千日堂前七丁目・北千日堂前八丁目・北千日堂前九丁目・北千日堂前字松境
	千日町	北千日堂前二丁目・北千日堂前三丁目・北千日堂前四丁目・北千日堂前五丁目
	南千日町	南千日堂前・北千日堂前一丁目
	栄町	浜畑町・今町
	御成町	浜畑町・戸野町・寺町・南千日堂前・南砂田・北砂田・北千日堂前一丁目
	寿町	寺町・今町
	中央東町	寺町
	中央西町	寺町
	相生町一丁目	鷹町・戸野町・筑後町・近江町・天正寺町・浜町
	相生町二丁目	戸野町・寺町・浜町・十王堂町
	幸町一丁目	北水出・南水出・大字浜田字堀北・新片町・天王下・筑後町
	幸町二丁目	北水出・南砂田・天王下
	浜田一丁目	大字浜田字堀北・大字浜田字堀南・新片町・筑後町・近江町
	浜田二丁目	北水出・南水出・大字大多新田字夜揚下・大字大多新田字大坪・大字浜田字堀北
	旭新町	旭新町・大字大多新田夜揚下・大字漆曾根字札谷地

昭和42年5月1日実施	新井田町	大字浜田字堀南・荒瀬町・八軒町・山王堂町・給人町・中ノ口町
	一番町	荒瀬町・米屋町・天正寺町・浜町・給人町・元米屋町・下内町
	二番町	十王堂町・浜町・鍛冶町・檜物町・下内町・本町一丁目
	中町一丁目	上内匠町・寺町・大工町・桶屋町・本町二丁目・本町三丁目
	中町二丁目	上内匠町・下内匠町・寺町・上中町・本町四丁目・本町五丁目
	中町三丁目	下内匠町・寺町・下中町・伝馬町・本町六丁目・本町七丁目・秋田町
	上本町	中ノ口町・片町・元米屋町・上内町・下内町
	本町一丁目	上内町・本町一丁目・肴町・細肴町・上袋小路・稲荷小路・片町
	本町二丁目	本町二丁目・本町三丁目・稲荷小路・山椒小路・中袋小路・実小路
	本町三丁目	本町四丁目・本町五丁目・本町六丁目・本町七丁目・実小路・下袋小路・利右衛門小路・染屋小路・船場町
	東栄町	東浜田・大字浜田字四之堰・東中ノ口町
	若浜町	若浜町・大字浜田字四之堰・大字浜田字苗代堰・東中ノ口町・大字大町字フケ
	緑町	北大町・大字大浜字フケ
	末広町	東中ノ口町・大字大浜字フケ・大町
	東中の口町	東中ノ口町・字札ノ前
	亀ヶ崎一丁目	亀ヶ崎町・横道町・山居町・字鶺川・戸沢町
	亀ヶ崎二丁目	亀ヶ崎町・横道町・戸沢町・字鶺川
	亀ヶ崎三丁目	立町・戸沢町・横道町・袋町・長泥町
	亀ヶ崎四丁目	立町・字的場・長泥町・最上町
	亀ヶ崎五丁目	立町・横町・字内川原・字松原南
	千石町一丁目	千石町一丁目・山居町・字西川原・字竹藪
	千石町二丁目	千石町二丁目・字竹藪・字西川原・立町
	山居町一丁目	山居町
	山居町二丁目	山居町・字中島・字小中島・字栗林瀬
	入船町	字小中島・字中島・字団子瀬・字下瀬
	堤町	字小中島・中瀬町・字竹藪・立町・字外川原
	若竹町一丁目	若竹町一丁目・若竹町二丁目
	若竹町二丁目	若竹町三丁目・若竹町四丁目
	若原町	若原町・立町・字外川原・字的場
	船場町二丁目 (1～3街区)	船場町・山居町・利右衛門小路